



「だって、そうじゃなきゃ——
生きるのって辛いと思うんだ」

及川ミズキ

あなたといるから ver.1.75

第二章

第四話……05P

第五話……14P

第六話……27P

第七話……40P

あとがき……50P

あなたというから ver. 1.75

第二章

著者／流遠亜沙

I couldn't face my life without you.

それはきっと、幸せのための道標。

第四話『涙』

タタリガミ。

それは——異形の存在。

それは——災厄を呼ぶもの。

形状は様々だが、全高はどれも十メートル前後。既存——もしくは空想上——の生物の姿を模した個体が多く、一般人からは単に『怪獣』とも呼ばれている。

タタリガミが初めて確認されたのは二年前——西暦二二二二年四月三日。日本の宮崎県・高千穂町だ。

その形状は八つの頭を持った蛇——日本神話に登場する怪物・ヤマタノオロチを想起させるものだった。

これに対し、日本政府は対タタリガミ戦用機神〈スサノオ〉を投入し、タタリガミに対し勝利を収めた。日本政府はタタリガミの出現を予測しており、そのための対抗手段として人型兵器をあらかじめ用意していたのだ。

ヤマタノオロチに酷似した怪物を、スサノオの名を冠した巨人が倒す——それは神話の再現のようだった。

それ以降、タタリガミは何度も確認された。

そして、そのすべてが〈スサノオ〉によって殲滅せんめつされた。

タタリガミが現れる理由、その目的は完全には判明していない。

だが、その出現位置は高千穂の地に限定されており、対抗する手段もある。だから、タタリガミによる実質的な被害は極めて小さい。進路が変えられない台風や、予測不可能な地震の方が、まだ災害としての恐怖は大きい。

局地災害指定生物とされながら、人類にとってタタリガミはそれほどの脅威ではない——はずだった。

† † †

「——というのが、一般に公開されているタタリガミと〈スサノオ〉に関する情報ね」
説明を終え、鳴海カヤはコーヒードリで唇を湿らせた。

カナコと出逢った日の翌日。

学校を終えたミズキは〈タカマガハラ〉のグリーンフィング・ルームに来ていた。

正式に〈タカマガハラ〉の特別スタッフとなったが、服装は私服で構わないと言われた。

そもそも、ミズキはまだ高校に入学したばかりの学生であり、その立場はカナコの相談役という、極めて特殊なものだ。

それでも最低限の情報知識として知っておいてほしい——そのためにカヤが今回の説明会の場を用意した。

ちなみにミズキの隣の席にはカナコが、つまらなげそうに座っている。

神宮寺カナコ。

〈スサノオ〉の搭乗者。

艶やかな長い黒髪と、オフンディアン黒曜石のような黒い瞳。細くしなやかな肢体を黒いセーラー服に包んだ、はつとするような美貌の少女だ。

「……なに？」

ミズキの視線に気付いたカナコが口を開く。

「うん、カナコは本当に綺麗だなと思って」

臆面もなく、そんな事をのたまうミズキ。

「……馬鹿じゃないの？」

そう言うときカナコは、ふいとミズキから視線をそらせた。

普通なら機嫌を損ねたと思うだろう。だが、ミズキにはなんとなく、それがカナコの照れ隠しなのだと判っていた。

カナコは無表情ではあるが、無感情ではない。ただ感情表現が苦手なだけなのだ。

人と接するのが苦手な不器用な少女。

そう考えるとカナコが可愛く見えてくる。

同時に、笑ってほしいと思う。歳相応の少女のような笑顔が見たいと思う。

だからミズキは言葉を重ねる。

凍てついた彼女の心を、少しずつ解きほぐすように。

† † †

顔が熱い。

カナコは沸騰しそうな頭をなんとか冷やそうと、努めて平静を装っていた。

本当に、この少女は何を考えているのだろうか？

及川ミズキ。

身長はカナコより少し低く、体格は小柄。肩にかかるくらいの、ややウェーブがかかった黒いショートヘアと、黒く大きな瞳。ほわっとした雰囲気はハムスターのような小動物を思わせる。

十分に可愛いらしい容姿だろう。だが、特筆するほどでもない。

昨日知り合ったばかりの、どこにでもいそうな普通の少女だ。

なのに、なぜか彼女の言葉を意識せずにはいられない。

今までは、こんな事はなかった。

他人に心を乱される事などなかった。

自分はどうかしてしまったのだろうか？

それとも――

(ミズキの言葉だから?)

そんな風に考える。

ちらとミズキの方に視線を向ける。

ミズキはカナコと目が合うと、にっこりと微笑んだ。

(――!?)

慌ててまた視線をそらす。

カナコの鼓動が早まる。

これでは、まるで恋する乙女のようなではないか。

(恋? 私が? ミズキに?)

馬鹿馬鹿しい――くだらない思考を、そう切って捨てたかった。

だが、ならば、この気持ちはなんだろうか？

カナコには判らなかつた。

† † †

「すごいわ、及川さん。まさかカナコを一日でデレさせるなんて」

カナコとミズキ――二人の少女のやり取りを見ていたカヤは、感心したように言った。

はため 傍目には一方的に話しかけているミズキを、カナコがあしらっているように見えるだろう。

う。だが、カヤも二年以上、カナコと付き合っているのだ。カナコの表情がわずかに緩んでいるくらいは判る。

「……誰がデレてるんですか? 適当な事、言わないでください」

不機嫌そうな態度を隠す事なく、カナコは冷たい視線をカヤに向ける。常人であれば委縮いしゆくしそうな絶対零度の視線だが、付き合いの長いカヤは怯ひるまない。むしろ楽しそうに、その視線を受け止める。

「ふふふ、隠しても無駄よ——ツンデレちゃん？」

「……………」

勝ち誇ったようなカヤの挑発に対し、カナコは無言。

十秒ほど沈黙が続いたところで、カナコがミズキの手を握って立ち上がった。

「行きましょう、ミズキ。ここは空気が悪いわ」

「え、でも——」

「いいから。(スサノオ)、見たいんでしょ？」

そう言うとカナコはミズキを連れてブリーフィング・ルームを出て行った。

「ふむ、ちよつと大人げなかったかしら」

少女達がいなくなった部屋でカヤは独りごちた。

言葉とは裏腹に、反省している様子は無い。

むしろ、満ち足りたような表情でカナコ達が出て行った扉を見つめていた。

嬉しかったのだ、カナコの変化が。

同時に少し寂しい気持ちもあった。

自分はカナコを変えられなかった——変えてやれなかった。

だが、ミズキはそれをやってのけた。たったの一日で。

「……私は母親には向いてないのかもね」

カヤは再び独りごちた。

† † †

「ねえ、よかったの？ 勝手に出て行って」

廊下を進むカナコに手を引かれながら、ミズキはその背中に問いかけた。

「いいのよ。あの人は私をからかって楽しんでるだけなんだから」

カナコはミズキに振り向きながら答えた。

そこで気付いた。ミズキが妙に嬉しそうな顔をしている事に。

「……………何、にやにやしてるの？」

「え？ ううん、カナコの手は温かいなって思って」

はたと気付く。何気なくやってしまったが、今、自分はミズキと手をつないでいる。

急にそれが恥ずかしくなって、カナコは慌てて手をほどいた。

「……ごめんなさい」

そんな言葉しか出てこない。

「なんで謝るの？」

ミズキは不思議そうに首を傾げた。

カナコが何を謝っているのか判らない——そんな様子だ。

「……嫌じゃなかった？」

「カナコはあたしと手をつなぐのが嫌なの？」

「そんな事……ないけど——」

「なら、いいじゃない」

そう言うと今度は、ミズキの方からカナコの手を握ってきた。先程までの握手に近い形ではなく、互いの指を絡める、いわゆる『恋人つなぎ』だ。

そしてカナコの隣に並ぶと、「えへへ」と少し恥ずかしそうにはにかんだ。

「——!？」

言葉にならなかった。

顔が熱くなるのが止められない。

つないだ手から、ミズキの体温が伝わってくる。

久しく感じていなかった——人肌の温かさ。

（なんなの、この状況は……？）

ちらとミズキの横顔を見ると、カナコほどではないにせよ、緊張しているのが見て取れた。

（恥ずかしいなら、やらなければいいのに——）

そう思いながら、カナコは悪い気分ではなかった。むしろ嬉しかった。

自分と触れ合ってくくれる人がいる。

隣に並んでくれる人がいる。

それが嬉しくて。

だけど、それをどう表現すればいいのか判らなかった。

ありがとう——そんな言葉が言えるほど素直ではない。

だから、ほんの少しだけ、ミズキとつながっている手に力を込めた。

伝わればいいと強く願って。

するとミズキは、カナコの方を向いて、もう一度はにかんだ。

（気付いてくれた……？）

ミズキの表情は透明で、純粹で、無垢で。カナコには眩まぶしかった。
(どうして、こんな風に笑えるんだろう?)

判らない。昔は自分もこんな風に笑えていたはずなのに。
いつからだろう。何かきっかけがあったのだろうか?

(やっぱり私は、何か大事なものが欠けてるんだ……)

ミズキと手をつなぐ資格などない。

誰かと触れ合っている人間ではないのだ。

そんなネガティブな思考が湧き上がるのが止められない。

(……死にたい)

いつも、最終的にそこに行き着く。

心が空っぽになって、空虚な倦怠感に侵される。

しかし――

「――どうしたの……?」

ミズキの不安に曇った顔がカナコを見上げていた。

「泣きそうな顔してる」

ミズキの言葉に、カナコは首を傾げた。

悲しくなどない。

ただ空虚なだけだ。

泣きたいわけじゃない。

ただ――

「私は……」

言葉が出ない。

ミズキが手をつないでくれたのが嬉しくて、それを伝えたかっただけなのに。

そんな事すら出来ない自分が齒がゆくて、何も言えない自分が情けなくて。

「私……」

ミズキの顔が見られない。きっと困惑しているだろう。立ちつくしている自分を不審に
思っているかもしれない。そう思うと、もう前を向けなかった。

そうしていると。

「――カナコ」

「え……?」

柔らかな感触と共に、ぎゅっとミズキに抱きしめられていた。つないだ手はそのまま、

空いている手でカナコの頭を抱くように。

「あたしね、昔はよくいじめられて。泣いて家に帰ったら、お母さんがこうやって抱きしめてくれたんだ」

泣く子をあやすよう母親のようにミズキは言った。彼女の髪の毛の匂いが、カナコの鼻腔びこうをくすぐる。

（どのメーカーのシャンプーだろう？）

そんな、どうでもいい事を考える。

ひどく落ち着く。

ミズキの身体の柔らかさと体温が心地良い。

「あのね、あたしはカナコに出逢ったばかりで、まだ何も知らないけど——泣きたい時は泣いていいんだよ」

「!？」

「悲しいのに泣けないのは辛いよ。だから人は泣くんだよ。悲しくなくするために。だから、泣いていいんだよ？」

ミズキの言葉にはっとした。

（私は『悲しい』って感情すら判らなくなってたんだ……）

言われるまで気付かなかった。

「……私は嬉しかったの、あなたと手をつなぐ事が出来て。でも、それを表現出来ないのが悲しかった」

そう。これは悲しいという感情だ。

「だから、違うの……嬉しかったからで、泣きたいわけじゃなくて——」

上手く言葉に出来ない。こみ上げてくる感情を処理出来ない。

それを察したのかミズキは、

「あのね、嬉しくても人は泣くんだよ。だから、泣いてもいいんだよ」

と、もう一度繰り返した。

そこでカナコの感情は溢れた。

空っぽのはずの心が、感情で満たされた。

気付けば、ミズキの身体にしがみつくようにして泣いていた。

こんな風に人前で泣くのは何年ぶりだろう。

ずっと心を閉ざして生きてきた。

他人と関わらなくても生きていけると思っていた。

いや、違う——そう思わなくて生きていけなかったのだ。

他人に対する恐怖が始まった日。

それは新たな絶望の始まりの日だった。

その日からカナコの感情は少しずつ死んでいった。

（いつか、すべての感情が死んで、私も死ぬと思ってた）
だが、ミズキと出逢った。

（ミズキが私を救ってくれる？ 〈スサノオ〉じゃなくて……？）

〈スサノオ〉。

それはカナコの救済のはずだった。

タタリガミを殲滅せんめつするための機神きしんにして、心のよりどころ——そのはずだった。

（——ッ!?!）

そしてカナコは、真っ黒に染まった〈スサノオ〉の姿を幻視げんしした。その形相ぎようそつは見なれたヒロイックなものではなく、鬼神きしんのような禍々まがまがしいものだった。

（……そう。いつか、あなたが私を殺してくれるのね）

新たな絶望と、ほんのわずかな安堵感が胸中を満たす。

やがて、心に浮かんできた黒い〈スサノオ〉の姿が消える。

同時に、今、自分が幻視したのも忘れてしまっていた。

† † †

廊下で抱き合って立ちつくす二人の少女の姿に目を留めた人々は、一瞬、何かと声を掛けようとしたが、ミズキが『大丈夫です』という顔で笑うので、実際に声を掛ける事はしなかった。

幸い、すぐ近くにベンチがあったので、ミズキはカナコの身体を抱いたまま移動し、二人で座った。幼い子供のように泣きじやくるカナコを、ミズキは無言で抱きしめ続けた。やがてカナコの泣き声が寝息に変わった。疲れたのだろう。体重を掛けられているはずなのに、それを重いと感じないのは、カナコが痩せているからだと判る。

（身長はカナコの方が高いのに……体重は同じくらいかな？）

それはちよつと、ずるいと思う。

それから、カナコの無防備な寝顔に視線を向ける。普段は『綺麗』な印象だが、寝顔は『可愛い』と感じる。

（もっと仲良くなれば、もっと色々なカナコが見られるかな？）

それは、すごく魅力的で楽しみな事に思えた。

だけど、悲しい顔はもう見たくない。

そんな事を思っていると、カナコの身体が何かに脅えるように、一瞬、びくと震えた。

「……………〈スサノオ〉——」

悪夢にうなされるように、カナコの唇が動いた。わずかに聞き取れた単語は、ミズキもよく知る機神の名だった。

夢の中で〈スサノオ〉の名を呼んでいるのだろうか？

助けを求めるように。パートナーの名を呼ぶように。

目尻に涙を浮かべたカナコの表情からは、推測する事しか出来ない。

だが、それでミズキは自分の気持ちに確信が持てた。

「泣いてる顔も綺麗だけど、あたしはカナコの笑顔が見たいよ」

そう言って、自分の腕の中で眠る少女の目尻に浮かんだ涙を、そっと拭った。

第五話『スサノオ』

カナコの涙を見た翌日も、ミズキは（タカマガハラ）に来ていた。

昨日は泣き疲れたカナコをカヤに預け、帰宅の途に就いた。ヤヒロが代わりに（スサノオ）の格納庫まで案内をしようかと提案してくれたのだが、それは丁重に断った。理由はカナコに案内してほしかったからだ。ミズキの意図を察したヤヒロはそれを了承し、代わりに、彼女を車で自宅まで送ってくれた。

そして今、ミズキはカナコと並んで、改めて格納庫へと続く廊下を歩いていた。

「昨日は、ごめんなさい。その……取り乱してしまって」

ふいにカナコが呟いた。出逢った頃と変わらぬ無表情のはずだが、どこかよそよそしいのは、人前で泣いてしまった事を恥じているからだろう。

「ううん。気にしないでいいよ、そんな事」

対するミズキの返事はあっさりしたものだった。カヤなら面白がって話を混ぜ返すところだろう。

だが、ミズキはそれをしない。基本的に真面目な性格なのだ。

『好きな子をいじめる』より、『好きな子には好きだとアピールしたい』タイプとも言える。

ともあれ、カナコにしてみれば追及されないのはありがたかった。

だから――

「……ありがとう。その、色々――」

口をついて出ってしまった感謝の言葉に、カナコ自身の気持ちが追いついていけない。言葉尻が途切れてしまう。

「……………ごめんなさい。上手く、伝えられなくて」

足を止め、俯うつむいてしまう。

そんなカナコを、ミズキはどうしようもなく愛いとおしいと感じてしまう。母性本能をくすぐられるなどといった甘いものではない。

（なんだろう、この気持ち?）

ミズキは己に問いかける。カナコに対して感じる感情の正体を。

（友情?）

それは微妙に違う気がする。

(愛情?)

近い気がする。

誰かを大切にしたいと思う、この気持ち。

切なく、優しく、愛おしいと感じる感情。

それは――

(恋……?)

† † †

自己嫌悪。

恐らく、自分にもっとも似合う言葉のひとつだろう。

まったくもって嫌になる――カナコは心の底からそう思う。

ありがとう――ただ、ミズキにそう伝えたかっただけなのに、余計な事を言ってしまう。

どれだけ消極的ネガティブなのかと、自分の思考が嫌になる。

こういう自分が嫌いだ。

根暗で。自虐的で。マイナス思考で。

ほとほと愛想が尽きる。

それでも、これが自分だ。

やめる事も、棄すて去る事も出来ない。

一生付き合っっていくしかないのだ。

いつしかカナコは、そんな風に諦あきらめて生きてきた。

だが……。

(もう、こんな風に考えるのはやめよう)

だって――

(ミズキがいてくれるのだから)

俯いていた顔を上げる。そうして見えたのはミズキの笑顔だった。

言葉にはせず、ただ気遣うように、ぎゅっと自分の手を握ってくれている。

それが嬉しかった。

それだけで立ち向かえる気がした。

嫌いな自分に。

だから――

「……………ありがとう——」

もう一度、そう言った。

今度は無粋な言葉で終わらせないために、ぐっと唇を引き結んで、じつとミズキの目を見つめる。小動物を思わせる黒く大きな瞳を。

見様によっては睨んでいるように見えるかもしれないが、それは仕方ない。ミズキなら判ってくれる。そんな勝手な希望を込めた。

「……………」

ミズキの返事は簡潔だった。

しかし、カナコにはたくさんの想いが込められた一言に思えた。

伝わったのだ、カナコの想いも。

それが嬉しくて、カナコはミズキとつないだ手を、ぎゅっと握り返した。

無愛想なままなのは仕方ない。

今はこれが精一杯だから。

† † †

そんな小さなやり取りを終え、二人は〈スサノオ〉の格納庫に到着した。

そこに控えていたのは、人と同じ四肢を持った全高八・五メートルの巨人だった。

対タタリガミ戦用機神〈スサノオ〉。

白を基調にしたカラーリングに、ヒロイックでスマートなデザイン。頭部は小さく、『目』が二つある。

「……………すごい。本当に〈スサノオ〉だ——」

たつぷり三十秒は見上げたままの姿勢で、ミズキはようやく、それだけ言葉にした。

カナコも改めて自分の愛機を見上げてみる。

確かに、ミズキのようなロボット好きにしてみれば『カッコイイ』のかもしれない。

カナコにしてみれば、もう二年以上、共に戦った戦友だ。それが憧憬のまなざしで見られるのは誇らしくはある。

だが、ミズキの興味が別の対象に移ってしまったようで、それはそれで面白くないとも感じる。

「……………コクピットも見てみる？」

それでもミズキが喜ぶなら——そう思っただけ提案すると、

「いいの!? 見たい見たい!!」

予想以上の食い付きに、カナコは内心で少しだけ引いていた。

＋　＋　＋

それから小一時間ほど——ミズキは〈スサノオ〉のコクピットのシートに座り、操縦桿しやくじゅうかんを引いたり、ペダルを踏んだりしては、興奮して嬌声きょうせいのようなものを上げていた。

何が楽しいのかは正直、理解に苦しんだが、ミズキが満足ならそれでいい。

そう自分を納得させてカナコは、コクピットから出るのを惜しむミズキを連れて昇降機を操作する。床に降り、ミズキはもう一度〈スサノオ〉を見上げる。

「あたし、〈スサノオ〉に乗っちゃった——」

どこか恍惚こうこうとした表情を浮かべるミズキ。

それを呆れ顔あきでカナコが見ていると、

「——よう。もういいのかい、新人のお嬢ちゃん？」

と、声を掛けられた。

声のした方に二人で振り向く。そこにいたのは五十代くらいの年齢に見える男性だった。

「野口さん。〈タカマガハラ〉の整備関連のチーフをしている人」

「よろしくな」

カナコの簡潔な紹介を受け、野口はミズキに握手を求めた。

だが、ミズキがそれに応じようとする——カナコが制した。

「駄目よ、あまり近づいたら。無害そうな中年に見えるけど、実際はセクハラ親父だから」

「——へ？」

カナコの言葉の意味が一瞬では理解出来ず、ミズキが間の抜けた声を出す。

すると、野口は短く舌打ちし、

「いいじゃねえか、カナコちゃんよ。女子高生の手を握るくらい？」

と、のたまった。

「そういう思考だから駄目なのよ。セクハラをするならカヤさんにしてください。あの人なら——ええ、何の問題もありませんから」

「はあ？ 二十代の女なんかに興味はねえ。おじさんは十代の女の子が好きなんだよ」

「——行くわよ、ミズキ。ここは危険だよ」

「まあ待て。お城ちゃん、〈スサノオ〉の解説とか聞きたくないかい？ おじさんが色々、教えてやるぜ？」

野口の言葉にミズキのロボット好きセンサーが反応した。

「聞きたいです!」

「そうこなくつちやな! まあ、立ち話もなんだ。飲み物でも奢おごってやるから、ゆつくりしていきな」

そう言つて野口はミズキを自販機に誘導していく。

「……………はあ」

カナコは盛大に溜息ためいきを吐つき、二人に続いた。

† † †

買つてもらつた緑茶の缶を片手に、ミズキは野口の声に耳を傾けていた。カナコは『セクハラ親父だ』と言つていたが、〈スサノオ〉の解説をしてくれる彼には、悪い感情は抱かなかつた。

「——とまあ、そんな感じだ。なんか質問があれば訊いてくれていいぜ？」

やはり気の良いおじさんに見える。先ほどの『十代の女の子が好き』発言はどうかと思うが。

「じゃあ——〈スサノオ〉って動力は何なんですか？」

「さすがはロボット好きだな。普通、女子高生がメカの動力なんぞに興味は持たんぜ？」

「えへへ、やっぱり変ですかね」

「いや、実に素晴らしい。ちなみに〈スサノオ〉の動力は——核融合炉だ」

ミズキの質問に、野口は真顔で答えた。

「ええっ!? 核融合炉って実現化してたんですか!?!」

「いや、すまん。冗談だ」

それを聞いてミズキはがっくりと肩を落とした。核融合炉といえばロボットアニメの代名詞とも言える作品で使われている動力機関だ。それだけに冗談である事が惜しい。

「じゃあ、何で動いてるんですか? もしかして蓄電池バッテリーですか? まさかガソリンじゃないですよね?」

ロボットアニメ史上、ロボットがガソリンを燃料に動いていた作品もある。あまりSF的ではないが、それが味があるという声も聞く。

「あ……………」

「?」

野口がカナコの方を向いて、窺うかがうような表情をした。それに対してカナコは『了承』というように頷うなずいた。

それで相談は済んだのだろう。野口はミズキの方に向き直ると、

「——わからん！」

と口にした。

「……『ワカラン』？ 聞いた事ありません。それって、どういう理論なんですか!？」

「いや、そうじゃなくてだな。判らないんだ」

「……判らない？」

ようやく漢字変換が出来たミズキは、呆気にとられた表情で繰り返した。

「そうだ。〈スサノオ〉が何で動いているのか、俺達には判ってないんだよ」

野口の言葉に耳を疑いながら、ミズキは甘いブレンドの缶コーヒーを啜すすっているカナコの方を見た。

「本当よ。〈スサノオ〉がどういった理論で動いているのか、誰も知らないわ」

そう言つてカナコは、〈スサノオ〉が〈タカマガハラ〉で運用されるに至つた経緯を話し始めた。

† † †

〈人類の黄昏たそがれ〉。

時代が二十一世紀となり、十年が経過した頃——今から約百年前にそれは始まった。

劇的な変化が起きたわけではない。むしろ、その頃を境に変化は起こらなくなった。

具体的に言つと——技術の進歩が止まった。

理由は判らない。

ただ、科学技術と呼ばれるものの発達が見られなくなった。

技術の停滞。

日進月歩などという言葉は過去のものとなり、衰退こそしないものの、人類は新たな技術を生み出せなくなった。

それを『人類の進化の袋小路』だと言う者もいた。

それでも人は今日まで生き続けた。

それは緩慢かんまんな滅びへと向かう日々でもあった。

知恵を得て、文明を築いた人間は、巨大化した社会を維持するためのシステムを造り、それを維持しなければならなかった。

それは走り続ける事だ。

より豊かに、より便利に、より良い未来のためにと。

もはや、止まる事は許されない。

止まるという事は、衰退する事と同義なのだろう。

少しずつ、確実に、人類はその生物としての活動を縮小させていった。

結果的にこの百年、人類は長い歴史から見れば驚くほどに『何もしていなかった』。

携帯電話の形や機能は変わっていない。移動手段にしても、光の速度を超えられず、瞬間移動の類の技術などなく、車は今もタイヤで地面を走っている。ネットワーク技術もインターネットを超えるシステムは開発されず、連絡手段は未だに『紙』を使っている。宇宙進出など夢のまた夢だ。

ただ一つだけ喜ぶべき事があるとすると、『戦争』と呼べる規模の争いが起こっていない事かもしれない。

この百年——戦争は一度も起こらなかった。

それに引きずられるように、紛争やテロ行為すらも発件数が激減した。

無論、ゼロにはならない。だが、確実にゼロに近づいていた。

誰もが待ち望んでいた『世界平和』は、誰もが思いもよらない形で実現されつつあったのだ。

しかし、戦争のない世界で多くの人が途方に暮れた。

誤解を恐れずに言えば、それまで人は戦争によって生きながらえてきた。

兵士として戦うだけが戦争ではない。戦争で使われる兵器・武器・弾薬の製造に関わる者。食糧その他の物資の供給をする者。彼等の利益の恩恵を受ける者も、間接的に戦争をしているようなものだ。

戦争と無関係な人間などいない。

食料品や日用品が入手出来るのも、経済が回っているのも、何かしらの形で戦争と関わりがある。

平和な国に生まれて平和を実感出来るのは、どこかで戦争をしている国がある事を知っているからだ。

平和は、どこかの誰かを犠牲にして得られている。

ただ無自覚なだけで——いや、気付いていない振りをしていただけだ。

気付いていながら、気付いていない振りをする。

食事のたびに『この料理のために家畜が殺されたのか……』などと考えないように。

そうでなければ——生きていけないから。

しかし、戦争のなくなった世界は、その現実を人々に突き付けた。

ああ、自分達は戦争をして、その犠牲の上に生きてきたのだと……。

戦争のない世界で、人類は少しずつその数を減らしていった。

蔓延まんえんしていく虚脱感と倦怠感まいは人々の活力を奪い、厭世観えんせいを持つ者が増えた。

平和なはずの世界で、しかし、人は生きていけなかった。

技術の停滞が戦争をなくしたのか。

戦争のない世界が技術の進歩を止めたのか。

それは今になってはどうでもよかった。

ただ、人類が緩慢な滅びへの道を進んでいる事だけは間違いない。

そんな〈人類の黄昏〉が始まって半世紀以上が経過した頃。

「三十年前——西暦二〇八四年に〈スサノオ〉はここ、高千穂たかちほに降臨したの」

教科書通りの講釈を述べた後、カナコは普段通りの淡々とした口調で言った。

「降臨？」

オウム返しに口にするミズキ。

「言葉通りの意味よ。〈スサノオ〉は空から降りてきたらしいわ」

三十年前の話だ。当然、ミズキもカナコも生まれていない。

「それで？」とミズキは続きを促うながす。

しかしカナコは、

「それだけよ。これ以上の事は私も知らない」

と、匙さじを投げるように言った。

ミズキは混乱した。〈スサノオ〉は日本政府が開発したと発表されている。しかし、それが空から降りてきた？

「空って、宇宙っていう意味……？」

ミズキの疑問に、しかしカナコは「いいえ」と答えた。

「その日、大気圏外から日本上空に突入するコースに正体不明な物体は観測されていなかったそうよ」

「それじゃあ、つまり——」

「〈スサノオ〉は高千穂たかちほに突然現れた事になるな」

それまで黙っていた野口が、ミズキの考えを代わりに言ってくれた。

「だからって、馬鹿正直に『〈スサノオ〉は突然現れたんです。私達にもよく判りません』なんて発表したら、民衆は不安になるわ。それに、〈スサノオ〉には役目があった」

「役目って？」

「詳細は知らないけど、〈スサノオ〉が現れた時に、メッセージがあったそうよ。〈スサノオ〉という名前はそれで判明したらしいわ」

そこで、野口がカナコの言葉を継いだ。

「そして、タタリガミの出現もそれで知らされたそうだ。当時の日本政府はそれを信じて〈タカマガハラ〉を組織した。ここが戦いの場になる事も判ったから、大急ぎで区画整理やら法整備も行ってな」

ちなみに、技術解析のために分解しようと試みたが、〈スサノオ〉の装甲にはメンテナンス用の分割線パネルラインすら無く、内部構造は不明のままだそう。故に動力機関は元より、関節機構アクトチュエーターすら見る事が出来ない。

「じゃあ、〈スサノオ〉は整備出来ないんじゃないですか？」

ミズキがもつともな疑問を浮かべた。

対して野口は、

「出来ないというか、要らないんだよ。完全に整備要メンテナンス・フリーらず。壊れたら自動で修復してくれるんだわ、これが」

と、それでいいのかと疑いたくなるくらいきっぱりと言つてのけた。実際、先日の戦闘で損傷した〈スサノオ〉の左腕は完全に修復されていた。

これが自己修復というなら、まさにSFだ——ミズキは驚きを通り越して感動すらしていた。

「〈スサノオ〉を造つたのは、本当に神様かもしれない」

どうして人間を乗せる必要があるのかは謎だけどね——とカナコは、どこか自嘲的に呟いた。

「どついつい事？」

「私はロボット工学の事は知らないけど、二本足で立たせるだけでも大変なんでしょう？」
カナコの言葉は正しい。人間は当たり前に行っているために気付かないが、二本足で立つというのは、実はバランスを取るのが非常に難しい。これを巨大な人型で、さらに歩かせるとなると、どれだけの技術と時間と労力が必要になるか見当もつかない。

「そんなすごいものを造れるなら、人を乗せなくても動くように出来たんじゃなかったって思わない？」

ミズキの問いに、カナコはそう答えた。

「いわゆる自律稼働つてやつだな。まあ、安全面での配慮もあるんだろうが、俺が思うに〈スサノオ〉は人類に託されたんじゃないかね？」

「あ——そういう考え方、あたし好きです」

「？」

野口の意見にミズキが賛同する。それに対し、今度はカナコが首を傾げた。

「まあ、メカニックに興味がないカナコには判らねえだろうが、ロボットアニメなんかだと、そういうパターンもあるんだよ」

と、野口は苦笑しながら言った。どうも、野口もミズキと同じ趣味の持ち主らしい。

「だからね——『力を貸してやるから、あとは自分達でなんとかしろ。自分達の未来は自分達で切り開け』的なパターンだね」

ミズキは非常に楽しそうだ。

「……理解に苦しむわ」

そう言いながら、カナコは無言で、佇たたずむ巨大な愛機を見上げた。

物言わぬ機神は、ただ虚空を見つめるだけだ。

† † †

まだ〈スサノオ〉を見たいと愚ぐず図るミズキを多少、強引に連れ出して、カナコ達は食堂に移動していた。

気付けば、もう夕飯時になっていた。放っておいたら、何時間でも格納庫にいただろう。

ちなみに、自分も連れて行けと言う野口に、カナコが絶対零度の視線を向けて拒絶したのは言うまでもない。

「野口さん、全然悪い人には見えなかったけど？」

ミズキがのほほんとした口調で言う。

まったくもって、お気楽な性格だとカナコは溜息ためいきを吐いてみせた。

「そこが、あの人の油断ならないところなの。今日は〈スサノオ〉の話で盛り上がっているからいいけど、普段は本当にセクハラ親父よ。だから、私といた時には近づいては駄目」

「そうなんだ……」

カナコの熱のない淡々とした口調に、どこか怒気が混じっている気がして、ミズキは反応に困ったように曖昧に笑った。

「……………」

カナコは、そんなミズキを無言で見つめる。

本当に判っているのだろうか。

いや、この人の良い少女の事だ。判っていても、他人を悪く言えない性格である事はすでに知っている。

もう一度だけ溜息を吐いて、カナコは気持ちを切り替える。

そんな事よりも、ミズキと話したい事が別にあつた。

「——ねえ、ミズキ」

「ん、なに？」

注文したステーキ肉を咀嚼そしゃくしながら答えるミズキ。その様は口いっぱいにヒマワリの種を頬張ほおばったハムスターを連想させる。

(やっぱり小動物系ね)

カナコは内心で再認識する。

「？」

無言で何かを納得しているカナコに対し、ミズキは疑問符を浮かべた。

「ミズキ——出身は？」

「え？」

カナコの唐突にも思える問いに、ミズキはまた疑問符を浮かべる。

「その……私、ミズキの事を何も知らないなと思つて」

「うん」

「だから、今日はあなたの事を教えてくれると……嬉しいというか。迷惑でなければだけ
ど」

「うんうん！ いいよ、何でも訊きいて！ 迷惑なんかじゃないよ！」

カナコの窺うような問い掛けに、ミズキは満面の笑みを浮かべて答えた。

その嬉しそうな表情に、カナコはほっとする。

「あたしね、この春に東京から来たの。それまでは東京で生まれて、ずっと向こうで暮ら
してた」

「どうして高千穂に？」

カナコが疑問に思うのも無理はない。高千穂といえばタタリガミが出現する土地として世間的には認識されている。〈スサノオ〉の存在によって被害は最小限に抑えられているが、それでも皆無ではない。わざわざ危険な土地に引越してくるには、それ相応の理由があるはずだ。

しかし——

「あのね——〈スサノオ〉をこの目で見たくて」

「……………」

カナコは無言。

絶句しているわけではない。むしろ予想出来ていた答えた。

しかし、実際に口にされると、やはり言葉が出なくなる。

「馬鹿だって言われるかもしれないけど、あたしね、本当に〈スサノオ〉が好きなの。どうして、こんなに惹かれるのかは自分でも判らない。ロボットが好きだからっていうのもあると思う。けど、〈スサノオ〉は何か違うの。特別な感じがするの。だから、少しでも近くに行きたくて、高千穂の高校を選んだんだ」

そう言ってミズキは、また曖昧な笑みを浮かべてカナコの反応を待った。

「……あなた、馬鹿じゃないの？」

この少女は——馬鹿だ。

カナコは率直にそう思った。

だから、思ったままを口にした。

言葉を選ぶ間もなく、口をつけて出てしまった。

しかしミズキは、

「あはは。やっぱり言われちゃった」

と、気を悪くした様子はない。

そう言われる覚悟があったのだろう。

「お母さんとお父さんにも反対されたんだ。高校は東京の学校に行きなさい——って」

「……………」

「だけどね、お婆ちゃんだけが『ミズキの好きにしたらいい』って言ってくれたんだ」

ミズキの話によると、彼女の母方の祖母が高千穂に住んでおり、ミズキの受け入れ先になってくれたらしい。余談だが、ミズキの父親は婿養子らしく、母親と祖母に頭が上がりないそうだ。

「じゃあ、ミズキは今はお婆さんって？」

「うん。お爺ちゃんももう亡くなってから、二人で暮らしてるよ」

ちなみに、西暦二二一四年の現在も首都は東京である。〈人類の黄昏 以降も、日本でもっとも大規模な都市である事には変わりはない。

それに対し、高千穂は三十年前に始まった大規模な区画整理計画により、中心部の人口は減り、交通の便は非常に悪い。

本来は都市の発展の要となる中心部が空白地帯なのである。必然的に様々なものが分散してしまい、結果——都市としての発展はしにくくなる。

要は辺鄙な土地なのだ。田舎と言われても仕方ない。

それに加えて、被害規模は小さいとはいえ、タタリガミのような化け物が出る様な土地に住みたがる——ミズキのような例外を除き——物好きはそういない。高千穂を離れる住民も少なくないのだ。

それでも『神話の里』としては今でも有名で、いくつもある神社はパワースポットとして知られており、観光名所として知られている。

ちなみに、区画整理によって一般家屋は中心部から遠ざけられたが、学校や神社など、動かす事が困難な施設に関しては元の場所に残っている。タタリガミの出現範囲内に高千穂高校があるのはそのためだ。

「そう。大都会・東京から、わざわざ好き好んで、こんな田舎に引っ越してくるなんて――物好きにもほどがあるわ」

「うん。だって、〈スサノオ〉が好きだから」

「……………」

あきれて言葉がないカナコに、ミズキは「それにね」と続けた。

「――ここに来なかったらカナコにも出逢えなかった。だから、来て良かったって思うんだ」

ほが
朗らかに言うミズキ。

その笑顔がまぶしくて、カナコは目を逸らした。赤面しているであろう顔を見られたくなかったから。

だから、これは照れ隠しだ。

「……………馬鹿じゃないの？」

「あはは。ひどいじゃー」

無邪気に笑うミズキは本当に馬鹿だと思う。

だけど、もつと馬鹿なのは、彼女の言葉が嬉しいのに、そう言えない自分だ。

格納庫にいる間も、ミズキが〈スサノオ〉に夢中で、正直、面白くなかった。多少、強引に食堂に移動したのも、彼女と二人になりたかったからだ。

もつと話したい。

もつと知りたい。

もつと一緒にいたい。

だから――

「ねえ、ミズキ……………今週の土曜日、一緒に出掛けない？」

第六話『休日（前編）』

四月十四日、土曜日。

学校が完全週休二日制のため、ミズキはカナコに連れられて観光名所を見て回る事になった。ミズキが高千穂を訪れたのは、まだ幼い頃——タタリガミが確認される以前——に来て以来数年ぶりだ。

まずは（タカマガハラ）を地下に持つ、高千穂神社からという事になり、二人は境内にいた。

高千穂神社は垂仁天皇時代に創設され、二千年以上の歴史を持つ神社である。平安朝期には高千穂八十八社の総社となり、武神、農産業、厄払い、縁結びの神として広く信仰を集めた。

高千穂のパワースポットといえば、まずここだろう。

「う〜ん……良いね。なんか神社って、空気が澄んでる気がする」

大きく深呼吸をして、周囲を見渡すミズキ。

敷地自体はそう広くないが、本殿があり、樹齢千年の巨木・株父杉があり、小さな売店もある。

本殿に立ち、鈴緒を振ると、がらんがらんと鈴が鳴った。

隣に立つカナコは目を閉じ、祈りを捧げているように見える。

「何をお願いしたの？」

「別に何も。ミズキは？」

「良い事がありますようにって」

「ずいぶんと漠然としてるわね。神様も大変だわ」

そう言うとカナコは本殿を離れ、ミズキもそれに続いた。

本殿の裏手に回ると木の柵で四方を仕切られた、一辺は一メートルもない小さなスペースがあった。その中心には平たい石が安置されている。

「『鎮石』よ」

ミズキが不思議そうに眺めていると、カナコが教えてくれた。

「この石に祈ると人の悩みや、世の乱れが鎮められる——らしいわ」

「へえ。どうして？」

「さあ？ この手の言い伝えすべてに納得出来る理由なんてないわよ」
カナコは興味なさそうに言った。

「——で、あれが悪神・鬼八を退治した三毛入野命ミケイルノミコトの像」

本殿の東側には剣を持った男が、鬼を踏みつけている場面が彫像で表現されている。

「あとは夫婦杉ね。三周回ると末長く暮らせるそうよ」

淡々と、カナコは手短かに解説をしていく。

地元の人間である彼女にしてみれば、珍しいものではないのだろう。

しかしミズキは、そんなそっけない言葉にも楽しそうに反応する。

「よし、回ろう！」

「私はいいわ。長生きしたいなんて思っていないもの」

「え〜？ なんで？」

「……ミズキはどうして長生きしたいの？」

ミズキの疑問に、カナコは疑問で答えた。

本当に判らない——そんな口調だ。

「どうしてって……」

「あなたは幸せね。何の疑問も持たずに、そう思えるんだから」

言ってしまったから、カナコは自己嫌悪に陥った。

またやってしまった。いつもこうやって他人を遠ざけてしまう。

自分の性格が嫌になる。

だが、言わずにはいられなかった。

ミズキの当たり前の感覚が、うらやましかったから。

死にたい——気持ちが悪く落ち込むたびに、そんな衝動に襲われるカナコにしてみれば、ミ

ズキの疑問は無自覚な悪意にすら思えた。

「——そうだね」

ミズキが呟くように口にした。

「あたしは何の不自由なく今まで生きてきて、たいした不幸も知らずに育った。きっと、これからもずっとそうなんだと思う。だったら良いなと思ってる」

「……………」

「だって、そうじゃなきゃ——生きるのって辛いと思うんだ」

ミズキの表情は常と変わらない。

なんでもない話をするように、その口調には悲観も楽観もない。

「カナコがどんな生き方をしてきたのか、あたしは知らない。だけど、これからは一緒に

知っていいける。知っていきたい。少しでも一緒に。少しでも長く」

だから――

「だから――一緒に回ろう？」

そういつてミズキはカナコの手を取った。

そっと。

自然に。

そしてカナコの返事も聞かず、夫婦杉に向かって歩を進める。

返事を聞くのが怖かったからではない。

言葉にしなくても、表情でカナコの想いを感じ取れたから。

† † †

二人は無言で夫婦杉を回った。

その沈黙は重たいものではなく、どこか居心地が良いとカナコは感じた。

同時に罪悪感で死にたくなった。

ひどい言葉をミズキに言ってしまった。あれは単なるひがみだ。

（みっともないな、私……）

あつという間に三周回り終えると、カナコはつないでいた手を離れた。

「？」

不思議そうにミズキが小首を傾げる。

「どうしたの？」

「……私には、ミズキと手をつなぐ資格がない」

「どうして？」

「……………」

答えられない。

何を言っても自虐的で、ミズキを困らせるだけだと判っているから。

言葉に詰まり、カナコは顔を伏せた。

しかし――

「資格なんて要らないよ」

その言葉にカナコが顔を上げると、ミズキは少し困った顔をして笑っていた。

「もし資格が要るなら、あたしがあげるよ――なんていうのは偉そうだね」

あはは、と苦笑するミズキ。

その困った様な笑顔がカナコにはまぶしかった。
（やめて……）

自分には、そんな笑顔を向けられる資格もないのだ。
（こんな私には……）

「——あ、またネガティブ・モードに入ってるでしょう？　だんだん判るようになってきたよ、カナコの思考」

「……ごめんなさい」

「謝らないで。カナコは悪くないよ」
違う。

悪いのは自分だ。

ネガティブな思考しか出来ない、ネガティブな自分なのに。

「……どうして、ミズキはそんなに優しいの？」

「え？」

「どうして、私なんかに優しくしてくれるの？」

「カナコ——」

ミズキの表情が一瞬曇った。

判っている。

『私なんか』という言い方が悪いのも。

少しの間、考えをまとめるように沈黙すると、ミズキはゆっくりと自分の考えを口にした。

「あたしがカナコに優しいんだとすれば、それは、あたしもカナコに優しくされたいからなんだと思う。誰かに優しくしておけば、それはいつか自分に返ってくる。『情けは人のためならず』って、本来はそういう意味なんだよ？　結局は自分のため。打算的でしょ？　自己満足もいいところだよ」

そう言つて、あはは、とまた苦笑する。

「——そんな事ない」

「うん？」

「たとえミズキが自己満足のつもりでも、私は嬉しかった。優しくされて——嬉しかったわ」

「……そっか」

「ええ、そうよ。だから……ありがとう」

「あはは。どういたしまして、でいいのかな？」

そうして言葉を重ねるうちに、カナコは重かった心が、少しずつ軽くなっていくのを感じた。

「じゃあ、最後に売店見て次に行こう？」というミズキの言葉を潮に、二人は夫婦杉を離れた。

せつかくだからと、ミズキは天然石の付いたお守りストラップを買った。

黒い天然石で『オニキス』というらしい。形は勾玉まがたまを模している。

「カナコのブレスレットと同じ色にしてみた」

ミズキの言葉にはつとし、カナコは右腕に巻いている鈴と黒い天然石のブレスレットを見つめた。

ミズキとおそろい——それはとても魅力的な響きに思えた。

だから——

「私も買う……」

ミズキと同じストラップを買い、携帯電話に取り付ける。赤い紐ひもの先に天然石と鈴が付いたシンプルなものだ。袋には『高千穂神社限定』と、よくある売り文句が書かれていたが、地元の人間には、ありがたみはあまりない。

それはすでに住人になっているミズキも同じはずなのだが、彼女はやけに嬉しそうに、ストラップを揺らしている。

その理由が判らないほどカナコも鈍感ではない。

おそろいのストラップ。

そんな他愛のない事で喜んでるミズキ。

それがカナコも嬉しかった。

† † †

高千穂神社につながる階段を降り、歩道に出る。少し歩けば参拝客用の駐車場があり、そこには紀藤きとうヤヒロが待機していた。

三十路みそじ手前のいい大人のはずだが、長めの黒髪とラフな私服姿のためか、どこか飄々ひょうひょうとした雰囲気きせきの男性だ。

今日はカナコとミズキの運転手役である。

「やあ。どうだった、高千穂の名所巡りのスタート地点は？」

「最高でした！」

ヤヒロが訊ねると、ミズキは満面の笑みを浮かべてそう答えた。

「そいつは結構。夜は『神楽舞』もやってるから、今度は夜に行くといいよ」と、ヤヒロはなぜかカナコに視線を向けた。

「ヤヒロさん……」

対するカナコはどこか困ったような表情を見せた。

それを疑問に思っている。

「カナコちゃんはね、神楽舞の舞手なんだよ」

「そうなんだ！ あたし、見たい！ いつ見られるの？」

ヤヒロの言葉にミズキが目を輝かせる。

対してカナコは『余計な事を』と言わんばかりに苦い顔をして言う。

「……今夜よ」

† † †

今夜の予定が確定した後、天岩戸神社、穂觸神社、荒立神社を巡って、高千穂峡の近くにある食堂で休憩がてら昼食を摂る事になった。

「あー、お腹空いた」

席に着くなり、ミズキが大きく息を吐いて言った。

主な移動は車なのだが、天岩戸神社の天安河原など、徒歩も多かったため身体的にも疲労が溜まっていたようだ。

「おつかれさま、ミズキちゃん。この後も少し歩くから、しっかり休んでね」

そう言うのは本日の運転手・ヤヒロだ。彼は終始、運転手に徹しており、観光には加わらなかった——カナコとミズキを一人きりにしようという配慮だ——のだが、昼食くらい一緒に摂ろうというミズキの意向で、同席している。

「今日は車を出してくださいって、ありがとございます」

「いえいえ。お役に立てて恐悅至極だよ」

ミズキの礼に対し、ヤヒロはそう言っておどけて見せた。

注文を終え、雑談に興じる。

ヤヒロは高千穂の出身ではなく、外部から〈タカマガハラ〉に参加したと言う。

彼の口調や表情は常に穏やかで、人当たりの良さを感じさせる。

気さくなお兄さん——というイメージがミズキの中で強まる。

違和感を覚えたのは、その時だった。

カナコが妙に静かなのだ。

元々、無口な少女だ。それはこの一週間で判っていた。
だが、今のカナコの様子には緊張感のようなものを感じる。

「……カナコ、どうかしたの？」

「え？ いえ、別に——」

反応もどこか、ぎこちない。

「もしかして体調が悪いとか？ 大丈夫？」

「ほ、はい。大丈夫です」

ヤヒロが心配そうに訊くと、ミズキの時とは少し違う反応が返った。

その原因がなんとなくミズキには判った気がした。

「ねえ、カナコ」

小声で声をかける。

「ひよつとして……ヤヒロさんがいるから緊張してる？」

「——っ！」

カナコの頬が薄く赤みを帯びる。

彼女にしては珍しいくらい判りやすいリアクションだ。

「あ、その……違うの、そういうのじゃなくて——」

言い淀むカナコ。

その様子が、年齢相応の女の子に見えて、ミズキには微笑ましかった。

† † †

高千穂峡の名物に貸しボートがある。

『せっかくだから、二人で乗つといい』というヤヒロの提案で、カナコとミズキは自然の絶壁に挟まれた川をボートで渡っていた。

生い茂る緑の中を進んで見えるのは、神秘的な光景だった。

「——ヤヒロさん、素敵だもんね」

ふいのミズキの言葉に、向かい合わせでオールを漕いでいたカナコの手が止まった。

「やっぱり、そうなんだ」

顔を伏せてしまったカナコを見て、ミズキは確信した。

カナコがヤヒロを異性として意識している事を。

やはり微笑ましい。

普段は無口で他人を寄せ付けない孤高の存在。

そんなカナコが、年頃の少女には当たり前にある思春期特有の悩みを抱えている。普段は趣味ホビにしか反応しないミズキの乙女センサーがびんびんに反応する。追究したい。

だが、相手はカナコだ。

下手な事を言つて機嫌を損ねたら、大変な事になる気がする。

「……ミズキが思っているような事じゃないから」

どうしようか考えめぐねていると、呟くようにカナコが言った。

オールを漕ぐ手は止めたまま、伏目がちに。

「あたしが思つてるような事って？」

少し意地が悪いと自覚しつつ、ミズキは内心でにやにやしながら、カナコに続きを促した。

「だから……ヤヒロさんの事が好きだとか、そういうのじゃないの」

「でも、気にはなってるんだよね？」

「……………」

無言の肯定。

そう受け取ったミズキは焦らず、じつくりと話を聞き出す事にした。

＋　＋　＋

「三年前——私が中学一年生の時の話よ」

わずかな沈黙を挟み、カナコはヤヒロとの出会いを話し始めた。

「学校に行けなくなつて、家で引きこもっていた私を（タカマガハラ）にスカウトしに来てくれたのがヤヒロさんだった。最初で最後ね、ヤヒロさんがスーツを着ているのを見たのは」

それを聞いたミズキは『スーツを着ているヤヒロ』という図がイメージ出来なかった。

カナコ曰く、就職活動をする若者そのものだったらしい。

飄々としているために年齢不詳な感があるヤヒロだが、三年前といえは二十五歳のはずだ。今とそう変わっているとは思えないので、余計にスーツ姿が想像しにくい。

「正直に言つて、似合つてなかったわ。けど、それが良かったのかもしれない。真つ当な『大人』には見えなかったし、かといって『若者』っぽくもない。この人は何をしている人なんだろう——そう思ったの」

だからヤヒロと話をする気になつたとカナコは言った。

三年前の五月。

一ヶ月で中学校を不登校になったカナコは、降りしきる雨の音を聴きながら、ぼんやりとした表情で目の前のスーツ姿の青年を見ていた。

青年の名前は紀藤ヤヒロというらしい。

彼は自己紹介を終えると、『とある国家プロジェクトに参加してほしい——ただし、命の保障は出来ない』と本題を切り出した。

「——え？」

カナコは耳を疑った。

一介の女子中学生——しかも不登校——に向かって何を言っているのだろうか？

カナコは次に青年の正気を疑った。

「……どういう事ですか？」

当然の疑問を言葉にしたのは父だった。

このところ、まともに口を利いていないカナコにしてみれば、久しぶりに聴く声だった。

「……………」

同席している母も同じ気持ちなのだろう。

無言でヤヒロの発言を待っている。

「二十七年前、ここ高千穂で一つの事件がありました——きしん機械の降臨です」

ヤヒロの口から語られたのは、〈スサノオ〉と呼ばれる巨大な『機械の神』が二十七年前に現れていた事。そして、〈スサノオ〉の出現によってもたらされた『預言』だった。

その内容は『タタリガミ』と呼ばれる脅威の出現と、それに対抗するための情報だった。情報は段階的に開示される仕組みになっているそうだ。

「そして先日、ようやく〈スサノオ〉の搭乗者が開示されました。それがカナコさん——君だ」

ヤヒロはどこか飄々とした態度は崩さず、カナコに視線を向けた。

「つまり、こういう事ですか？ カナコにその〈スサノオ〉とかいうのに乗って戦えと？」

父の言葉にヤヒロは頷いて返答とした。

父も母も言葉をなくしていた。そもそもヤヒロの話を信じていなかっただろう。

それが普通だ。

だが、カナコは〈スサノオ〉という響きに不思議な感覚を覚えた。

惹かれたといつてもいい。

暗澹たる日々。鬱屈とした現状。すり減っていく感情。

それを変えたい。

それが出来るなら——死んでもいい。

カナコの中にそんな想いが沸き起こる。

そこへ——

「カナコさん、君は今の人生に満足してるかい？」

ヤヒロの質問に、カナコは答えられなかった。

「俺はね——この世界が嫌いだ」

「……………」

「こんな世界は終わってしまえばいいと思ってる。俺には何も出来ないから」

ヤヒロの言葉に、カナコは強い共感を覚えた。

世の中に不満があるのに何も出来ない無力感——それをカナコは嫌になるくらい知ってる。

だが、ヤヒロの目は違う。あきらめてしまったカナコとは違う目をしていた。

「けど、君は（ヘスサノオン）に選ばれた。人生を変えるチャンスを与えられた」

ヤヒロの言葉が、どこか官能的な響きをもってカナコの耳朶を打つ。

「誰のためでもない。世界のためでもない。自分自身のためでいい——この、どうしよう

もない世界に抗ってやりたいと思わないか？」

その言葉が決定打だった。

† † †

「そんな事があつたんだ」

カナコの話聞いたミズキは、ヤヒロらしい口説き文句だと感じた。

「お父さんとお母さんには反対されなかったの？」

「私がそうしたいなら、そうすればいいって」

カナコの口調からは、両親の気持ちは判別出来ないが、彼女の自由意志を尊重しての事だとミズキは思う事にした。

話が一段落すると、カナコはオールを再び漕ぎ始める。

束の間の静寂。

この間にも、もう慣れた。

普段なら会話がないうちが持たない性格のミズキだが、カナコという時は不思議と落ち着く。

オールを漕ぐカナコの表情は無表情というより無心で、どこか凜々しく見える。そんな彼女の表情に見惚れていると――

「――見て、ミズキ」

ボートが進むと、カナコが指をさして言った。

彼女が示す方向に慌てて顔を向けると、断崖から流れ落ちる滝が目に入った。

「真名井の滝よ」

カナコが言うと、ミズキはその光景に歓声を上げた。

落差十七メートルの高さから流れ落ちる滝――『日本の滝百選』にも選ばれたその絶景は見る者を圧倒する。

「すごい……」

しばしの間、真名井の滝の絶景に目を奪われるミズキ。すると――

「……ヤヒロさんはね、私の憧れなの」

呟くようなカナコの言葉で、ミズキの意識が彼女に向く。

「憧れ？」

「そう。プライベートな事は話せないけど、ヤヒロさんも私と同じような生き方をしてきたそうよ」

飄々としている、どこかつかみどころがない印象のヤヒロにも、当然、彼の人生がある。

今は気の良いお兄さんに見えるが、過去にはカナコのような時があったという事だろうか。

「生きる事にうんざりしていた私に、ヤヒロさんは〈スサノオ〉という可能性をくれた」

ミズキは黙って続く言葉を待つ。

「判ってるの。ヤヒロさんが私を選んだわけじゃない。だけど、スカウトに来たのがヤヒロさんじゃなかったら、私は拒否したかもしれない。世界を護るために戦え――そういう類たぐいの事を言われてたら、私は絶対に戦わなかった。こんな世界、壊れてしまえばいい……そう思っていたから」

淡々と語るカナコ。

「けど、ヤヒロさんは違った」

世界に抗え。

誰のためでもなく、自分のために戦え。

「ヤヒロさんは、私みたいな人間の『痛み』を知っている。だから私を救ってくれた。実際、〈スサノオ〉に乗ってから私の世界は変わったわ」
「そうなんだ」

「ええ。だからヤヒロさんには感謝してる。だけどそれは、恋愛感情じゃない」
「でも、ヤヒロさんという緊張するんでしょう？」

「……上手く話せないだけよ」
それを緊張しているというのではないだろうか。

ミズキがそんな事を考えていると、

「私はミズキがうらやましかったのかもしれない——」
と、カナコはやはり呟くように言った。

「え？ どうして？」

「私は、ミズキみたいにはヤヒロさんと話せない」

「カナコ……」

「何を話せばいいか判らないの。ヤヒロさんに限った事じゃないけど」

そう言ってカナコは少しだけ俯うつむいた。

滝が落ちる音だけが静寂の中で響く。

「——でもさ」

沈黙の中、ミズキが声を上げた。

「あたしとは話せてるよね？」

「……そうね。ミズキは例外だわ」

「特別って言ってほしいな」

口を尖らせるミズキだが、悪い気はしていない。

例外。

それはカナコの照れ隠しだろうと思う事にしたから。

「じゃあ、これからあたしをヤヒロさんだと思って練習してみよう、『カナコちゃん？』」

「……………」

ミズキの言葉に、カナコがジトツとした視線を向ける。

「馬鹿じゃないの？」

「え？ あれー？ 想像以上に冷たい反応!？」

ミズキが傷付いたと言わんばかりのリアクションをする。

その大げさな反応がおかしくて、カナコは小さく笑った。

それが嬉しくて、ミズキも笑う。

普段は無表情で綺麗なカナコが、笑うとこんなに可愛い——その事実を知る者が自分を
含め、ほんの少ししかいないのは、もったいない気がすると思ふ。ミズキは思ふ。

「話せるようになるといいね、ヤヒロさんとも」

「……ええ、そうね」

カナコは他人事のように答えた。

そっけないその反応を、ミズキは照れ隠しなのだろうと思ふ事にした。

第七話『休日（後編）』

「〈撃ち砕くもの〉——その威を示せ！」

カナコの口から、言霊が告げられる。

同時に〈スサノオ〉が構えた〈アメノムラクモノツルギ〉の先端から、赤い閃光が光線と
なって迸る。

その先にいたのは巨大な『蜘蛛』だった。全高約五メートル。黒い体色に赤い複眼。
〈ツチグモ〉。

それは名前の通り蜘蛛の姿をしたタタリガミの一種である。

『土蜘蛛』とは本来、古事記における上古天皇に恭順しなかった土豪達を示す名詞であり、
蜘蛛の妖怪として知られるようになったのは後代になってからなのだが、カナコにしてみ
ればどうでもいい。

「その威を示せ！」

続けざまに長距離戦用の呪法——〈撃ち砕くもの〉を発動させる。

しかし、攻撃は当たらない。

〈ツチグモ〉の動きが速いのだ。

『接近して〈切り裂くもの〉の使用を提案します』

舌打ちするカナコに、〈スサノオ〉の操縦補助用ナビゲーション・システム〈ヤサカニノ
マガタマ〉が男声を思わせる機械音声で告げてくる。

「判ってる。けど、脚を止めないと接近も出来ない」

もう一度〈撃ち砕くもの〉を撃つ。

今度は、なぎ払うように魔剣を右に振るう。赤い閃光が〈ツチグモ〉を追尾するように
線を描いた。それが八本ある脚のうち、右脚の二本に触れ、塵状になって消えていく。

バランスを崩した〈ツチグモ〉が地面を削りながら派手に横転する。

『お見事です、カナコ。これで文字通り、向こうの脚は封じました』

「……〈ヤサカ〉、上手い事言ったつもり？」

〈ヤサカニノマガタマ〉——通称〈ヤサカ〉は妙に人間くさいところがある。あくまでナ
ビ——高度な人工知能でしかないはずなのだが、〈スサノオ〉と接続された影響なのか、

『彼』は経験を蓄積することに人格のようなものを形成していった。

カナコは時々、〈ヤサカ〉の言葉を〈スサノオ〉の意志なのではないかと錯覚する事がある。

『事実を述べたまでです。さあ、今のうちにとどめを』

〈ツチグモ〉は残った六本の脚で体勢を立て直そうとしている。確かにチャンスだろう。

「——行くよ、〈スサノオ〉」

ペダルを踏み込むと、〈スサノオ〉が命令どおりに駆けた。人間と同じ二本の脚を交互に前に出し、目標に向けて走る。

まだ思うように動けない〈ツチグモ〉に肉薄し、魔剣を振り下ろそうとする。

しかし——

「——!?!」

悪寒を感じたカナコは、反射的に〈スサノオ〉の機体を左に回避させた。

〈ツチグモ〉が口から『糸』の様な物体を吐き出してきたのだ。吐き出された糸が地面に

落ちると、その一帯が焼け爛れた様な状態となった。溶解液の類だろう。

「往生際が悪いわ」

〈ツチグモ〉の糸をかわした〈スサノオ〉は、腰部をひねった勢いそのまま魔剣を再度、振り下ろす。

「〈切り裂くもの〉——その威を示せ!」

じたばたと藻掻く〈ツチグモ〉の背を、赤い光をまとった〈アメノムラクモノツルギ〉が切り裂く。

〈切り裂くもの〉は近接戦用の呪法だ。効果範囲は狭いが、威力は高い。

先に消滅した二本の脚と同様、〈ツチグモ〉の全身も光になって消えていく。

——きしやああああああああああああああああああああああああああああ……。

断末魔の叫び。

だが、その叫びもカナコの心には響かない。

かつては感じていた勝利による高揚感も今はない。

「アラミタマ反応、消滅を確認」

『——こちらも確認したわ。状況終了。おつかれさま、カナコ』

通信機を介して、カヤの声が〈スサノオ〉のコクピット内に響く。

『今夜、及川さんに夜神楽を見せる予定だったんでしょ？ 残念だったわね』

そう——〈ツチグモ〉が顕現したのは、ミズキと真名井の滝を見て、ボートを降りた直

後だった。カナコはミズキと別れ、現場に急行。〈スサノオ〉を呼び出したというわけだ。

戦闘を終え、時刻はすでに午後七時を過ぎていた。夜神楽の時間は九時からだが、〈スサノオ〉で出撃をした日は、カナコは夜神楽に出る事を禁じられている。タタリガミの『穢れ』を神聖な場に持ち込む事になるからだ。

今夜の夜神楽にカナコは出られない。

「別に……機会なんていくらでもありますから」

残念がる様子も見せず、カナコはそう口にした。

『そう？ とにかく、おつかれさま。明日も及川さんと出かけるんですよ？』

「はい。明日は買い物に行きたいそうです」

『そう。いい機会だから、あなたも普通の女の子の休日を満喫してらっしゃい』

「……………」

カヤの軽口に、カナコは答える事が出来なかった。

「どうすればいいんでしょう」

『難しく考えなくていいのよ。彼女に任せて、引つ張りまわしてもらいなさい』

† † †

四月十五日。〈ツチグモ〉の顕現から一夜明けた日曜日。

ミズキがバスを降りると、待ち合わせ場所でもあった停留所には、すでにカナコの姿があった。昨日とは違った装いで、白いワンピースと幅広の帽子の組み合わせは、サナトリウム文学に登場しそうなヒロインそのものといった雰囲気をもっていた。

しばし、ぼーっとその光景を眺める。

やはりカナコは綺麗だ。気安く声を掛けるのをためらってしまうくらいに。

しかし、そうも言っていられない。カナコが待っているのは自分なのだから。

「お待たせ、カナコ——」

と、声をかけた直後——

「——っ!？」

突風が吹き、カナコの白いワンピースの裾がめくれあがった。

カナコは慌ててそれを押さえたが、ミズキには『また』見えてしまった——初めて出逢った日に見たのと同種の、挑発的な黒い下着が……。

「ミズキ……?」

呆然とするミズキの姿に気づいたカナコが、怪訝そうに名前を呼ぶ。

「カヤさんは出会った頃からそうだった。私を玩具おもちゃにして遊んでるのよ」
カヤに対する愚痴ぐちを言うカナコ。

だが、ミズキはそんな彼女の言葉の端々に、親しい間柄であるが故の感情のようなものを感じた。口では邪険に扱っているが、それはカヤに気を許している証拠だろうとミズキは思う。

「カヤさんは、カナコが可愛くて仕方ないんだよ。可愛い女の子がいれば、可愛い服を着せてみたくなるのは判るし……その、下着はちよつとやりすぎかもしれないけど」

下着という単語に反応して、カナコの頬がわずかに紅潮する。高校生にあるまじき、挑発的な黒下着を着けている自分に、改めて羞恥心を感じているのかもしれない。

「……行きましょう。今日は高校生らしい『普通の』下着を買うわ」

そして、少し口ごもるようにして、

「でも、普通ってよく判らないから……ミズキも一緒に選んでくれる？」

と、呟くように口にした。

その表情が可愛くて、放っておけない。

だからミズキの答えは決まっている。

「うん、もちろん。可愛いのを選んであげる」

そう言つてミズキはカナコの手を取った。

＋　＋　＋

（ミズキの手は温かいな）

何気なく手をつないでくれるミズキの体温を感じながら、カナコは引かれるままに歩を進める。

こんな風に誰かと手をつなげる日が来るとは思ってもみなかった。思い返してみれば、ミズキはよくこうして手をつなぎたがる。これが彼女の距離の縮め方なのかもしれない。

最初は抵抗があった。迷惑ではないだろうか？ 嫌がられていないだろうか？ そんな風に考えてしまうから。

しかし、ミズキの楽しそうな表情を見ると、そんな事を考えてしまう自分が馬鹿らしくなった。彼女はきつと、ただ良かれと思つて行動に移しているだけだ。

なんの打算もなく。

ただ、そうしたいから。

だから手をつなぐのだろう——それがミズキの愛情表現だから。

(ミズキ……)

つないだ手に想いを馳せる。

(あなたのためになら、きつと私は戦える)

だから、ずっとこうして手をつないでいてほしい。

そのためには戦わなくてはならない。タタリガミを倒すためではなく、この世界を護るために。

ミズキが生きる、この世界を。

† † †

まずは無難に大型デパートの下着売り場を巡り、次にブティックを物色し、気になったものがあれば試着をした。どの店でもカナコの存在は目立った。やはり美人だからだろう。

自然と店員が寄ってきては、あれこれと様々な服を勧められる。

美人は何を着ても似合うというが、ミズキはその実例を見せられている気分だった。

そして、カナコに対して嫉妬の類を抱かないのが、ミズキという少女の美德だった。むしろ、慣れない事態に困惑するカナコをフォローするのが楽しくて仕方なかった。

結局、デパートに入っていたブティックを全店制覇した。

散々あちこちで試着をしたが、結局、購入したのは最後に入った店のみだった。

カナコはミズキを選んだ、黒いゴスロリチックなスカートとキャミソールを。

ミズキはカナコを選んだ、ピンクハウスっぽいワンピースを。

どちらも普段着にするには派手なものだが、非現実感が気に入って買う事にした。

ミズキは『似合わないよ』と苦笑していたが、カナコが『いいえ、すごく似合ってる』

と主張して譲らなかつた。実際、ミズキは可愛らしい顔立ちをしているのだ。それに自覚がないのはもったいないとカナコは思った。

そして、それはカナコ自身にも言える事ではある。

要はカナコもミズキも似た者同士なのだ。

それに気付くと、なんだかおかしな気持ちになって、二人で笑った。

「そろそろ、お昼ご飯にしようか？」

というミズキの言葉を聞くまで、カナコは時間を忘れていた。そのくらい楽しくて、あつという間だった。

二人はフードコートフロアに移動し、それぞれに購入した食事の乗ったトレイを手に、空いているテーブルを見つけて席に着いた。

カナコはホットドッグとホットコーヒー。

ミズキはライスの上にビーフを乗せた鉄板焼き。

「本当に肉が好きなのね」

ランチでがつつりと肉を食べるミズキに、カナコは少しあきれていた。

「うん。カナコはそんなに少いで平気なの？」

ミズキは不思議そうに問う。

「充分よ。あまり食べる方じゃないの」

「だから、そんなに細いんだ……うらやましい」

「ミズキも、そんなに食べる割りには太らないのね」

「う……そんなに見ないでくれるかな」

ミズキが両腕で抱くようにして自分の身体を隠す。

「……………」

そういえば、以前ミズキに抱きしめられた時に、ふくよかな感触があったのを思い出す。服の上からでは判らないが、彼女は着やせするタイプなのかもしれない。

カナコはふと自分の胸元に視線を落とす。

「……………」

そして、ミズキの胸元に視線を移す。

「な、何かな……？」

カナコの視線の意味に気付いたのか、ミズキは居心地悪そうに身をよじった。

「……………隠れ巨乳」

「い——言わないで！ 恥ずかしいんだから……」

「否定しないのね」

「誘導尋問だ！ 謀ったな！」

「太らないわけね。栄養が胸に行ってるんだ」

「もう！ それ以上はセクハラで訴えるよ！」

顔を真っ赤にしてミズキが抗議してくる。

面白い。セクハラ親父——（タカマガハラ）整備班チーフの野口の事だ——の気持ち

少しだけ判った気がした。

そんな他愛のないやり取りが——楽しい。

普通の女の子同士の、普通の日常。

そんなものとは無縁だとカナコは思っていた。

（ミズキのおかげかな）

ミズキと出逢って変わり始めた。世界が変わって見えた。きつと自分も変わっていく——変わっていける。それがカナコは嬉しかった。

† † †

やがて食事も終え、話題が一旦途切れたのを潮に、カナコは昨日見せられなかった夜神楽の件を告げる事にした。

「昨日はごめんなさい。夜神楽、見せられなくて」

「仕方ないよ。〈スサノオ〉で戦った日は舞えないんですよ？」

事情はカヤから聞いている。だから、ミズキはカナコを責めないし、そんなつもりもない。

「次はいつ舞うの？」

「私の担当は土曜日だから、来週ね」

「そうなんだ」

「言っておくけど、『舞』と言っても華やかなものじゃないわよ？」

過度な期待をされても困ると、カナコは少しだけ真面目な顔をして言った。

「あたしは、カナコがやるから見たんだよ。カナコがやるから興味があるの」
それに、とミズキは付け加える。

「カナコが舞うなら、それはきつと綺麗だよ」

「……お面を付けるから、どれが私かなんて、判らないかもしれないわ」
カナコの表情が少し曇る。

（意地の悪い言い方だな。どうして、こんな事を言ってしまうんだろう）
だが——

「——判るよ」

ミズキは優しい笑みを浮かべていた。

「きつと見つけてみせる。あたしがカナコを見間違っ事なんてない」
その言葉は、カナコの曇った表情を吹き飛ばすのに充分だった。

「ミズキ……」

「だから、そんな寂しそうな顔しないで」

どうしてこうも、言っほしい言葉をくれるのだろう。

不安で仕方ない、心の闇を振り払ってってくれるのだろう。

（ねえ、どうしてミズキは私を気にかけてくれるの？）

言葉には出来なかった。言葉にするのが怖かった。

だから、想いを視線に込めて、じっとミズキを見つめた。

「……………」

「？ 何かな？」

きょとんとするミズキ。

伝わらなかった。だが、それでよかった。

今はまだ、これでいい。

いつか、そんな事が気にならないと思える日まで、この疑問は秘めておこう。

ミズキと一緒にいるのが当たり前になって、こんなつまらない事を考えた事もあつたな
と、思い出話に出来る日が来るまで。

あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『あなたといえるから ver.1.75 第二章』をお届け致します。

新サイトでの掲載にあたって、加筆修正をしながら、約一年ぶりに読み返してみたい
ました。

——カナコ、超面倒くさい。

自分で書いておいてなんですが、びつくりしました。

まさか、ここまで面倒くさかったとは……。

にも関わらず、ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます——おつかれさ
までした。

まあ、あれくらいネガティブ思考で心の闇が深い女の子なんです。

でも、こういう娘こほど心を開かせれば甘えてきます。

ただし、容易にヤンデレ化するので取り扱いには最大限の注意が必要です。

カナコの相手が出る。ミズキ——マジ天使。

作品解説みたいなものは次回以降に少しやると前回のあとがきで書いたので、少しだけ。

元々、完全オリジナル作品をやりたいという気持ちがありました。そこでモチーフに選
んだのが『古事記』です。

きっかけは何年か前の帰省の際、宮崎空港の売店などで古事記を推していたのを見た事
です。二〇一二年は古事記編纂へんさんから千三百年だったそうで、地元に関わりの深い神話だ
し、これをモチーフにしてみようと考えました。

僕が知る限りですが、当時は海外の神話に比べ、日本の神話はエンタメ業界でモチーフ
として大々的に使われている例が少なかったというのがあります。それだけに、二〇一三
年に『ささみさん@がんばらない』がアニメ化された時のショックは大きかったです。

「去年には完成してる予定だったし、べ——別に『ささみさん』の影響じやないないんだから

ね!」——などと無意味にツンデレしてみたり。

まあ、モチーフが被ってる売れ筋作品なんていくらでもあるんですが……。

ちなみに、高千穂には二〇一二年の九月に取材を兼ねて旅行に行きました。神社やら資料館など見て回り、第六話の神社のシーンなどに反映されています。宿泊した旅館の近くに高千穂神社があり、夜神楽も観ました。作品にどう反映されているかは第二章でご確認ください。

高千穂はパワースポットとして有名ですし、観光するには良い土地だと思います。

高千穂よいとこ一度はおいで。酒は美味しいし、姉ちゃんは——（以下略）。

それでは、良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

重い話ってしんどいですか？

……しんどいですよね。ええ、判ってます。

けど、僕は書いてても、読み返しても楽しいです。

オナー自己満足ですよ。すみません。

次で終わりなので、もちよつとだけお付き合いください。

第三章も、過激にファイヤー！

『あなたというから』ページに戻る
トップページに戻る